



秋元雄史がゆく、九谷焼の物語

LIBRARY

九谷焼の系譜 吉田屋窯、そして古九谷へと遡る

第二話

今回は、かつて古九谷を生産していた「九谷磁器窯跡」、そして旧九谷村から移された吉田屋の窯跡がある「加賀市九谷磁器窯跡展示館」へ。歴史を感じる二つのスポットを通じて、古九谷から現代九谷の礎と、発展の経緯を探ります。

「LIBRARY 秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」とは

長い歴史に育まれてきた九谷焼の「技」は、いかに生まれ、今後どのように変化していくのでしょうか？KUTANism総合監修・秋元雄史が自らその現場に足を運び、ナビゲーターと対話をするなかで、九谷焼を再発見していく連載シリーズ。

Starting out as raw pottery stone, they are painted, and eventually served at traditional ryotei restaurants. Just how exactly did such Kutani ceramics come to be, and come to be used? Through this mini-series, rediscover the origins and evolution of Kutani ceramics, with KUTANism supervisor Akimoto Yuji as your on-site guide.

WEB版はこちら





#02

九谷焼の系譜 吉田屋窯、そして古九谷へと遡る

KUTANism全体監修・秋元雄史が自ら現場に足を運び、ナビゲーターと対談をするなかで、九谷焼を再発見していく連載シリーズ「秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」。2021年度は“技法”と“伝承”をキーワードとして、九谷の魅力を、系譜を紐解きながら探っていきます。

第二話では、いよいよ九谷焼の流れを求めて、まずは文政9年(1826)に九谷村(現・加賀市山中温泉九谷町)から山代温泉越中谷に窯が移された吉田屋の窯跡がある「加賀市九谷磁器窯跡展示館」へ。大聖寺の豪商吉田屋伝右衛門が古九谷の美に憧れて開いた窯であり、吉田屋風と呼べる洗練された和絵具による色絵磁器を生産。国指定史跡として保存されています。

その後は場所を移し、更に山奥へ。古九谷の生産地だった加賀市山中温泉九谷町にある「九谷磁器窯跡」を訪れます。今からおよそ360年前、吉田屋窯から数えれば約170年前に作られた二つの登り窯と絵付窯の跡が残り、国指定の史跡となっています。

歴史の奥深さや当時の息遣いを感じる二つのスポットを通じて、古九谷から現代九谷の礎と発展の経緯を探ります。

目次

- ✓ 吉田屋をはじめ、その後に続く九谷焼が発展した
再興九谷の登り窯跡を公開する「加賀市九谷焼窯跡展示館」
- ✓ 作品に表れる、当時の自由でのびのびとした空気感。
- ✓ 古九谷、そして、初期の吉田屋窯跡まで 九谷焼のルーツが見つかった場所
- ✓ 江戸時代前期における色絵磁器の生産を裏付ける遺構の発見。
- ✓ この回のまとめ

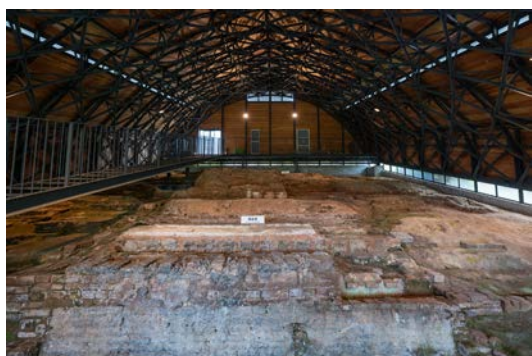


案内してくれた人

中矢 進一さん

能美市九谷焼美術館 | 五彩館 | 館長。九谷陶磁器史研究家として長年に渡り九谷焼の歴史を研究して来た第一人者。1977年石川県加賀市教育委員会、加賀市美術館学芸員、石川県九谷焼美術館副館長を歴任。2006年全国5会場巡回特別展「古九谷浪漫 華麗なる吉田屋展」監修。15年特別展「大名細川家の茶席と加賀九谷焼展」(永青文庫)監修。北陸新幹線金沢開業記念特別展「交流するやきもの九谷焼の系譜と展開展」(東京ステーションギャラリー)監修。会期中上皇上皇后両陛下下行幸啓に際し「ご説明役」を務める。共著に『ふでばこ(九谷焼特集)』、『九谷モダン』などがある。

吉田屋をはじめ、その後に続く九谷焼が発展した 再興九谷の登り窯跡を公開する「加賀市九谷焼窯跡展示館」



九谷磁器窯跡の全貌。九谷から移されて以降、同じ場所で作り替えや修理を繰り返しながら連綿と受け継がれてきた。

その後、陶器会社、民営会社と続き、昭和15年(1940年)までずっと途切れることなく稼働し続けました。さらに規模を縮小した登り窯で昭和40年(1965年)まで続けました。

(※) 赤絵具で細描きを多用する様式。現代の代表作家は福島武山。

中矢： これは国の指定史跡に認定されている吉田屋窯の登り窯跡です。吉田屋伝右衛門は文政7年(1824年)に古九谷窯と同じ山中温泉九谷町で九谷焼を再興したのち、2年後にこちらへ移ってきました。吉田屋窯は5年後に閉窯するのですが、それを吉田屋の番頭だった宮本屋宇右衛門が譲り受けて、天保3年(1832年)に宮本屋窯として再開しました。当時、宮本屋窯で赤絵をしていたのが飯田屋八郎右衛門という人物なのですが、彼の赤絵(※)が高い評価を受けて「飯田屋」が赤絵の代名詞となりました。やがて、その宮本屋も不幸が続いて閉窯することになるのですが、大聖寺藩前田家が買収して万延元年(1860年)九谷本窯という形で受け継いだんですね。

中矢： こちらは元々、嶋田さんという方の宅地だったのですが、庭にある松の木を植え替えるときに地面を掘り返したら、ちょうどそこが物原(※)だったんです。結構大きな庭木だったので、どんどん掘り返していくうちに下の層から吉田屋の鼠生地が出てきて「ここは山代の吉田屋窯があったところや!」と。そして、時間をかけて教育委員会の手で正式に全面発掘を。調査の結果、古九谷の窯跡から歴史をつなぐ九谷焼の立派な埋蔵文化財だということで、国の指定史跡として認められました。

(※)窯の周辺にある焼き損じなどの捨て場。



中矢： 九谷を再興した吉田屋九谷の作風だけでなく、飯田屋風、永楽風と様々な作風・様式を生み出しますが、全部この窯でできているんです。大聖寺前田家時代には金欄手など新技法の導入のために京都から永楽和全を招きました。もう一度、窯の変遷を整理すると、宮本屋窯以降は「藩宮九谷本窯」「民宮九谷本窯」「九谷陶器会社」「九谷陶器本社」「大蔵寿楽窯」「嶋田寿楽窯」と受け継がれ、最終的には昭和15年(1940年)まで、ずっと稼働していました。しかしながら太平洋戦争が厳しくなったときに、この大きな窯を維持することができなくなり、昭和15年(昭和40年まで継続)に、10分の1の規模の登り窯を築いたと。当時は一回の焼成で1万個が焼けたというので、これはその10分の1、1000個の規模ですね。

秋元： 吉田屋窯は数年で閉窯してしまったとのことですが、産業やビジネスとして見たときに、あまり儲からなかったのでしょうか。

中矢： 吉田屋窯は家族内での不幸が続いたため焼き止めを余儀なくされたのですが、初期投資をもう10年ほど頑張れば回収できたんじゃないかと思いますね。

秋元： 本職は別にあったのでしょうか？

中矢： 大聖寺城下の豪商で、藩に火薬を収めたり、酒蔵も営んだりしていて、今で言う総合商社にあたります。また参勤交代の本陣も務めたので、苗字帯刀(※)も許されていました。商人ですけど、藩役人も一目置く町役人みたいな感じだったんですね。

(※)農工商などの庶民が苗字を称し、帯刀するという武士に準じる資格を許されること。

秋元： それでも立ち行かなくなるっていうのは、窯の経営はやはりむずかったのでしょうね。



中矢： もし最初からここ(山代)で窯をしていたら、初期投資が二倍になることはなかったでしょうね。でも、それを通り越す情熱みたいなのがあったのでしょう。「古九谷の復興は、九谷村でしかない」という。

秋元： 単に新規ビジネスの立ち上げという以上に「古九谷を何としてでも自分の代でもう一回復活したい」という強い思いがありますね。さらに、「やるんだったら、やっぱり古九谷の窯跡があった場所で」と、かなりのこだわりを感じます。

中矢： 吉田屋はそれより百数十年後の人ですけども、大聖寺藩の町役人であり、文化人、教養人でもあったので、古九谷の価値を十分に知っていたんですね。だから何とかして九谷を復興したいという思いを持っていた。

秋元： 面白いですね。吉田屋という人を見ていると当時の教養人が見えてきます。教養人といえば武家階層だけだった江戸初期の時代から、吉田屋が再興九谷を始める頃は、文化文政、町人もだいたい豊かになって、色んなものに興味を持てるし学ぶ機会を得られたということなのでしょうね。

中矢： いわゆる文人と呼ばれる人たちが市井にたくさん生まれる豊かな頃、化政文化が花開く頃ですね。

秋元： 吉田屋の作品は絵柄の選び方も非常に文人趣味というか、色んな物語が詰まっていて、それも面白いですよね。

中矢： その頃には煎茶が流行したり、抹茶や生花などが文化人の間で教養として広まったりしていたので、それに伴って供する器が求められるようになりました。吉田屋の時代が、最も九谷の器が多様性を増し、花開いた時期だだと思います。古九谷の時代というのは、どちらかというと大皿に鯛を一尾のせて皆さんに出すというのが主流で、あとは小分けで、ちょっとした取り皿みたいなものがあるくらいだったのが、吉田屋の時代には器の形も豊富になっています。

秋元： 食事を楽しむための器の形は、ずいぶんと多様になっていますよね。

中矢： 桔梗や菊を模したり、向付にしても中央に鹿を描いて形は紅葉だったりとかね、非常に洒落ていましたね。そういうものを吉田屋窯は作って、文化人たちには非常に重宝がられていたのだと思います。



秋元： デザインは誰が行っていたのですか？職人たちに、それだけの教養があったのでしょうか。

中矢： 私はプロデューサーとしての吉田屋伝右衛門の存在は欠かせないだろうと考えています。私論ですが、具体的な指示は吉田屋伝右衛門が直接行っていたと思いますね。それに答えられるだけの力量がある職人を20人揃えたということですから。

秋元： じゃあ職人と言っても、吉田屋伝右衛門が言っていることをある程度理解して、それを絵に落とし込めるだけの技量があり、教養もあったということですね。



中矢： 窯の規模としては、べらぼうに大きいわけではありませんでしたが、それぞれの持ち場が明確に別れていて、支配人がちゃんとして、ろくろ担当がいて、信楽焼と京焼の出身者がいて、若杉窯から来た人もいて、しっかりした体制でした。錦窯（絵付け窯）では粟生屋源右衛門（※）をはじめとして三人で絵付けを行っていました。

（※）粟生屋源右衛門注釈／江戸時代後期に活躍した再興九谷焼の名工。若杉窯の本多貞吉に学んだ。

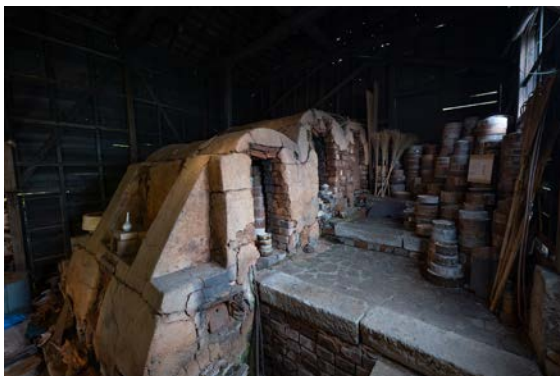
秋元： 全国から腕が良い職人たちを集めていたんだなあ。ある意味では、もし吉田屋がいなかったら今の九谷に続く技術やアートのクオリティがここまであったかどうか分からないですね。

中矢： そうですね。古九谷は前田家が始めたとして、吉田屋窯は吉田屋伝右衛門が古九谷をリスペクトして誕生したと。その次に赤絵が生まれ、宮本屋窯や飯田屋八郎右衛門が登場し、その後、京都から永楽和全がやって来て、金欄手（きんらんで）を九谷に持ち込んだ。つまり九谷焼の伝統的な画風様式、古九谷以降の吉田屋、飯田屋、永楽の伝統的画風は全部ここから生まれているんですね。



秋元： そうか、名前は途中で変わっているけど、本当に、ここでずっと連続しているんですね。そういう意味では重要な場所だなあ。

中矢： 私は来るたびに思うのですが、吉田屋から永楽まで、ここでみんなが額に汗して九谷焼を作ってたんやなって思うと、やはり感無量ですね。



昭和15年～40年まで実際に使われていた、現存最古の九谷焼登り窯。

作品に表れる、当時の自由でのびのびとした空気感。



隣接する母屋は旧窯元だった木造建築を修復。当時は一貫作業を行っており、ここには蹴ろくろ(けろくろ)のろくろ場、はがし場、絵付け場がある。



世界最大の放射光発生装置で成分の組成を検出した結果、九谷古窯製と識別され、正真正銘の「古九谷」であることが認められた作品「九谷古窯製伝世古九谷」(加賀市九谷焼窯跡展示館寄託品)。九谷製の色絵作品が確実に存在することが実証された。



永楽和全作「赤絵金欄手 鳳凰図向附」(加賀市九谷焼窯跡展示館寄託品)。

秋元： 赤絵も本当に良い作品だ、くうー!痺れますよね。これくらい描き込んであるといいなあ。途中で気が抜けてないですね。

中矢： これは永楽和全ですね。彼は京焼の出身ですが、彼が九谷に金彩(金欄手)を伝えたおかげで「赤絵金欄手」が広まりました。永楽は都合6年間山代にいたのですが、様々な逸話があるんですね。大聖寺のお殿様からもらった小判を潰して金彩にしたとか、お殿様から拝領した羽織を着て、それでろくろを回して作業着にしまったとか笑。

秋元：面白い人だなあ笑。

中矢：永楽は一族郎党(※)を連れてこちらへ来る際に、大聖寺・前田家から十分な藩札をもらって、だいたい3から5年くらいの間、ここに滞在することを契約したみたいなんです。藩札というのは、その藩でしか通用しないお札のようなものなのですが、それが衣装入れにぎっしりと詰まっていて、それこそ湯水のように使ったというエピソードもあるんです。

(※)血縁のある家族と家来たちのこと。

秋元：かなり優遇されていたということですね！

中矢：大優遇ですよ！幕末動乱の時代に、京都にいるよりも治安がいいし前田公の芸術的センスに応えられるという、永楽としては疎開的な感じはあるものの、芸術を探究した彼にとって最高の職場だったと思いますね。



敷地内には国指定史跡の「九谷磁器窯跡」、加賀市指定文化財の「山代九谷焼磁器焼成窯及び窯道具類」と「旧九谷寿楽窯母屋兼工房」がある。

中矢：九谷庄三も18、19歳の頃に、宮本屋窯で赤絵を学んでいるんです。宮本屋窯の前身の吉田屋窯で主工を務めた粟生屋源右衛門から色絵を学んだ庄三は、九谷焼本流の宮本屋窯で赤絵を学ぶことを師の粟生屋から勧められたのではないかと思います。おそらく「赤絵を勉強するのなら、ちょうど今、飯田屋が頑張っているからあそこで学んでこい」というようなことを言ったんじゃないかなと思います。1年半くらいかな、庄三はここにいる、それから小野窯へ行き、やがて寺井の方で独立するという流れになります。

秋元：結構みんな移動しているんですね。

中矢：当時の職人たちは、あちこちで修業してます。九谷庄三のように、他の地で色んなものを吸収して九谷に戻ってくるってことを色々な職人たちもできるようになったのは、江戸後期からだと思います。江戸初期は、やはり藩をまたいで自由に行き来というのは、関所みたいなものもあるし、とても厳しかったんじゃないですかね。



秋元： 吉田屋窯にしても若杉窯にしても、それぞれ窯のイメージがあるじゃないですか。それと窯の主要な職人として粟生屋源右衛門なんかがいたわけじゃないですか。窯と名工たちの関係はどうなっていたのでしょうか？

中矢： 同じ粟生屋源右衛門が作ったものでも、松山窯で作ったものと吉田屋窯で作ったもの、さらに自分で作ったものとは全く雰囲気が違うんですね。

秋元： 色々なタイプの職人さんや作家さん、その中間の立場の人たちも含めて、それぞれに個性があったのでしょうか、何か決まった型みたいなものがあるわけじゃないですよね。意外と自由だなと思って。今で言う企業に勤めみたい、自分を殺して型にはまるみたいな、そんなでもない。意外と自由な印象ですね。

中矢： おっしゃる通り、かなり自由だったと思います。吉田屋窯の就業規則が見つかったんですが、それが非常に面白くてね。吉田屋は造り酒屋をしていたので「夕方4時過ぎになったら、ここで働く人は皆んな自由にお酒を飲んでいいですよ」ということが書いてあったり、それから、おそらく職人に対してですが「もしも病気になったら、みんなで見病して親切にしてあげなさい」って書いてあったり。驚くのが、これ、江戸時代の文化文政の話ってことなんですよね。

秋元： 面白いなあ笑。



中矢： こういったことを、吉田屋伝右衛門はきちんと就業規則に書いていた。職人にとって自由な発想のもとのびのび作陶できる環境が、吉田屋窯にはあったということなんです。吉田屋窯で生まれた作品を観れば分かりますが、あれだけ豊富な意匠デザインで、あれだけ素晴らしいものを、たった7年で作っているのですから、すごいことですね。それも絵を描いていたのはたった3人という。これは憶測ですが、職人たちは毎日が楽しくて仕方なかったんじゃないかと思うんです。量産はせず一品主義ですから、毎回、新しいキャンパスに新しい絵を描けるんですね。

秋元：そうですね。製造をしている場所っていうよりも、ある種のラボ(研究所)のような感じがします。新しい実験をしながら「こういうのもやってみるか!」みたいな。

中矢：それを許容したのが、教養人・吉田屋伝右衛門だったんですね。やはり彼の存在は非常に大きいと思います。

秋元：吉田屋窯の醸し出す空気感というか遊びがある感じっていうのは、職場の雰囲気から出ているんでしょうね。決して工業製品にはない魅力だと思います。

中矢：このデザインを1000個作るとか、そういう話じゃないんですね。一つ一つ、違うデザインで作るという。永楽は都合5年ほど吉田屋窯の後継窯「九谷本窯」にいましたが、彼も自由でしたよね。名人気質なので、自分がしている陶器を見て学べと。そういうことを次から次へとやってくれた。ですから九谷が非常に豊かになったのは、前田家と吉田屋伝右衛門と永楽和全のお陰だと私は思います。

古九谷、そして、初期の吉田屋窯跡まで 九谷焼のルーツが見つかった場所

山代を後にして、山深く細い峠道・杉の水峠を超えてたどり着いたのは、山中温泉九谷町。今では無人になった旧九谷村跡地。九谷焼が初めて作られたとされる「九谷磁器窯跡」です。ここでは江戸時代前期に九谷第1、2号窯(九谷古窯または古九谷窯という)が、江戸時代後期にはこれを再興して吉田屋窯が築かれ、数多くの陶磁器が生産されました。

中矢：あちらに九谷1号窯跡が見えますね。位置関係としては九谷古窯の1号窯のそばに吉田屋の窯が築かれたということになります。

秋元：吉田屋は1号窯に敬意を表して、この場所で始めたのでしょうか？

中矢：大いにありますね。あちらに門が見えますが、近辺に水車があって、スタンパー(※1)のようなことをしていたみたいです。それから杉の木が生えている辺りは後藤田(ごとうだ)と呼ばれていた田んぼになりますが、そこが恐らく後藤才次郎(※2)の屋敷跡じゃないかと言われています。ですので工房も、あの辺りにあったのではないかと。

(※1)粘土の製造方法の一つ。杵のような機械を使って陶石を粉碎し、それを「水ひ」という方法により、粘土質になる部分だけ取り出す。

(※2)加賀大聖寺藩士。藩の命令により肥前有田で製陶法を習い、帰藩後に古九谷窯を開いたと言われている。

中矢：一方で吉田屋は古九谷の窯跡や工房跡に敬意を表して、あえて全く同じ場所には行かないんですね。少し離れたところで「ここでやらせていただきます」というような感じだったのではないのでしょうか。

秋元：相当リスペクトしていますね！

中矢：後藤才次郎がどんな人物かというのも知っていたので、後藤の名前が付く場所に何かを建てるということにはなかったんですね。古九谷の窯跡を色んな意味でリスペクトした上で、吉田屋伝右衛門はここに窯を築いたということですよ。



中矢： みんなここで「あれが古九谷を焼いた窯の跡地だ!」というのを意識しながら作陶していたんですね。職人たちはすごく嬉しかったと思いますよ。ただ冬は雪がすごかったものですから、山代に移転する話になって。ここで使っていた窯道具も含め、全部持って山代に下りたんです。ここで九谷が興り、たくさんの人たちが働いて、一生懸命焼き物を作っていたということを感じ取っていただければ嬉しいです。



陶石が見つかった「伝陶石採掘地」。採掘は鉱脈に沿って行い、必要に応じてトンネル状に掘り進んだ。

中 矢： 奥にある洞穴のように見えるものが「伝陶石採掘地」と呼ばれているものです。

秋 元： この場所よりも上流の真砂(まなご)や千束(せんぞく)というところでも、古九谷の時代から陶石を採っていたんですか？

中 矢： 恐らくそうですね。千束にも、登り窯の跡らしきものが残っているとされているんです。古九谷の窯以前に、もしかしたら小さな規模の登り窯が千束のそばで作られた可能性はあります。

秋 元： 試験的にやってみたのかもしれないですね。しかし思ったよりも採掘する穴が小さいですね。去年、花坂陶石の採掘現場へ行った時に「狸掘り」って言葉を教えていただいたのですが、昔は本当に小さい穴で掘り進んでいたようですね。結構、命知らずだなあ。



秋 元： ここには、どれくらいの人が暮らしていたのでしょうか。

中 矢： 大聖寺藩領の記録を記した資料から推測すると、200人ほど暮らしていたようです。ここは山伏等が往来する、いわゆる山の道のハブだったようです。そこを見込んで、九谷の集落に室町時代に成立した浄土真宗の寺院・九谷坊(くたにぼう)や、山の手工業(木地挽物)を背景として集落が繁栄していたと言われています。

秋 元： ここに木地工房があったのですね。

中 矢： そうですね。山中漆器の挽物の工人が住んでいたところになります。ですから古九谷の時代には、木地師も九谷の陶工たちも両方いた可能性は高いですね。



トイレ遺構の様子。現代のトイレトーパーに相当する「籌木(ちゅうぎ)」も出土している。計14基が見つかった。

中矢： ここでは水洗トイレの遺構も発掘されています。かなり先進的ですよ。それだけたくさんの方が、ここに住んでいたという証拠になります。



最も残りの良い状態で確認された絵付け窯跡(復元レプリカ。本物はこの下に眠っている)。

江戸時代前期における色絵磁器の生産を裏付ける遺構の発見。

中矢： これは絵付け窯があった場所です。九谷でも色絵磁器が江戸時代前期に作られたことを示す、とても重要な場所です。発掘調査では絵付け窯の土台部分が発見されていて、一角には焚口の痕跡もあります。

秋元： なるほど。本当に、こういう状態であったってことなんですね。

中矢： そうですね。ここから、こういった絵付け窯の遺構と思われる同じような焼土が7基発見されています。色の付いた磁器の破片も出てきているんです。ですので、絵付け窯はちゃんと稼働していたと。そのうち3基は確実に絵付け窯であるということが分かっています。さらに、場所を変えながら繰り返し作られた様子も明らかになっています。この絵付け窯の発見は、江戸時代の前期に九谷で色絵磁器が作られていたことの根拠となっています。日本初の色絵磁器は有田で1650年頃に作られていますが、発掘の結果、それから10年余りのうちに九谷でも色絵磁器の生産を開始したことが判明したんです。

秋元： 面白いなあ。これが発掘されたのはいつ頃なのでしょう？

中矢： 平成12年頃だったかと思います。



古九谷発祥の地であることを表す石碑。

中矢： 2015年、古九谷窯が開窯してから360周年の節目に、九谷焼創業の英断を称えて初代大聖寺藩主・前田利治公の石碑が作られました。九谷焼の開祖が前田利治公だったということは、前田家の現在のご当主も認めています。



九谷焼開窯360周年を記念して建てられた前田利治公の石碑。金沢城の石垣と同じ、戸室石で作られている。

中矢： それから、前田公に仕えた後藤才次郎の石碑が向かいにあります。これは360周年を機にこの場所に移築されました。元々、伝陶石採掘地のそばにあったものを窯跡近くに仮移設し、最終的に前田公の石碑そばに移ったのです。



後藤才次郎の石碑。

秋元： 後藤才次郎は何歳くらいまで生きたのでしょうか。

中矢： それが、明らかになっていないんです。金沢市寺町に後藤一族の墓を守っている寺があり、過去帳が管理されているのですが、後藤家には代々、才次郎を名乗る家があるんです。ですので、明治の初めまで、後藤才次郎と名乗る人が何人もいた。ただ我々が言う「江戸の初めの古九谷に関係した才次郎」というのが、古九谷が終わった後にどうなったかというのは、よくわかっていません。ただ才次郎定次とそのあとを継いだ才次郎忠清が九谷焼に関わったと言われています。定次の没年は1683年説と1686年説があります。忠清は1704年まで生きていたことは過去帳で明らかです。享年はわかりません。

秋元： なるほど。



中矢： 古九谷の窯が閉じられたこと自体も、その原因・理由に定説はありません。古記録によれば元禄年間中に、藩より製造禁止が出て閉じてしまったわけです。最初は前田利治公の意向で明暦年中に始まったであろうと。その間、約半世紀の稼働期間だった。謎の部分はあるとしても、遺構、遺物、古記録等から、ここが色絵磁器を焼いていた九谷焼のルーツの地であることは疑う余地はありません

この回のまとめ

幻の九谷様式を復活させた吉田屋窯を訪ね、その後、古九谷の窯跡にも足を伸ばした。同行者は、能美市九谷焼美術館館長の中矢進一さんだ。ここのところ九谷焼についていろいろ教えていただいていた、今回の歴史をたどるパートでもお世話になった。二つの場所を訪問して印象に残ったのは、古九谷に迫る芸術性と品質を誇った吉田屋窯である。吉田屋窯以降の宮本屋窯、松山窯など、その後続く九谷焼の水準をつくった。その吉田屋窯は採算度外視で制作し、約7年で廃業した。こういう破天荒なことをした豪商・吉田屋伝右衛門という人はどんな人だったのだろう。同じ時代に生き、仕事に関わってみたいかった。

Techniques for creating individuality



<https://kutanism.com>